
人魚姫と人魚の王子

一々

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

人魚姫と人魚の王子

【Nコード】

N2549BA

【作者名】

一々

【あらすじ】

上半身がヒト、下半身が魚。そんな人魚はもう遠く昔にいなかった。ってしまった。

人魚姫のアリシアが魔女と契約し、海の世界を捨てて地上に上がってしまった。それを知った弟オズワルドは従者二人を引き連れ姉を海に連れ戻そうと地上へ上がった。そこから始まる人魚物語。

恋愛とか絡む予定だけど、よくわからないからファンタジーカテゴリーです。

ふるきもの(前書き)

プロローグみたいな

ふるきもの

”ふるきもの”

上半身がヒト、下半身が魚類。それが人間のもつ人魚の姿。けれどその姿は古く昔に消え果てていた。

時が経つにつれ、下半身は二股となり、ヒトにちかい物となつていった。下半身を覆う鱗は残っているが、その数も少ない。衣をまとつことの無かった人魚はその変化に伴い砂や海草、死んだ珊瑚などに魔術を施し海の中の服を作り出した。

そんな変わり行く人魚には稀に、昔のように下半身が完全に魚類のものをもつ者が生まれることがあった。それに対して人魚たちは敬意をもって”ふるきもの”と呼び、神聖なものだと崇めた。

めつたに現れることのない”ふるきもの”。けれど、海の王の七人の子供たちは全員その”ふるきもの”だった。

美しい姫たちは魚のように海を舞い、勇ましい王子たちは海を蹴つて国中を泳いだ。

西の海の七兄弟。

”ふるきもの”の中でも海中にその名を轟かせている人魚だった。

ふるきもの（後書き）

そんな人魚がいるって設定です

人魚姫が消えた

人魚 水中に生息されると考えられた、伝説上の生き物。

「なんの騒ぎ？ なにかあったの？」

闇色の髪に、それに相對するような真っ白な肌。やけに騒がしい城内にゆらゆらと動かしていた尾ひれを止め、オズワルドは立ち止まった。城内の灯る明かりに反射して微かにキラキラと腰から下を覆う深い海色の鱗が輝いた。

オズワルドはこの国の王子、下半身が魚類の姿である”ふるきもの”だった。

髪の間から覗く鱗と同じ深い海色の瞳に疑問の色を携え、オズワルドは慌しく城を行き交っていた一人の臣下に問うた。

先ほどから魔術師や大臣たちが忙しなく動いている様を見てさすがに放つて置けなくなったのだ。王から何も言われないのだから、自分が手出することではないのかもしれないが、さすがに見ぬ振りというのも難しい。なにより、オズワルド以外の兄弟たちが何か知っているようなので、末弟だからと自分を蚊帳の外にされるのは気分がいいものではなかった。

「ああ、王子殿下・・・」

老練の臣下はオズワルドの姿を視界に捉えると、決まり悪げに目を泳がせた。

「？」

その態度にオズワルドは頭を微かに傾け、どうしたのか、と再び問おうとした時、一人の伝令が息を切らせながら近寄ってきた。

「セロイネア殿！伝令です！やはり・・・」

けれど、伝令の声はそこで途絶えた。オズワルドの姿を見つけ、ハツとしたように言葉を嚙んでしまった。

「・・・構わぬ。伝令を」

セロイネアの言葉に、オズワルドも頷いて伝令役の兵に目を向けた。

少し戸惑っていた兵もその言葉に姿勢を正し、言葉を口にした。

「第三王女のアリシア様はやはり・・・地上に上がられているようです」

「姉上が？地上に・・・？」

整った眉をぴくりと歪め、オズワルドは聞き返した。兵はその通りだと頭をさげ、臣下は瞼をきつく閉じていた。

深い海色の瞳に浮かんでいた疑問の色は困惑へと変わり、そして燃え盛る炎のような怒りを灯した。

「何故ッ！姉上が地上に出るには早すぎる！まだ足の怪我が治っておられないのに！」

「殿下、落ち着きください。兵が困っています」

臣下が厳しい声で言い、オズワルドはハツとした。兵のほうへはじかれるように視線をむけると、オズワルドの怒号に恐れるように半歩下がり、その身を縮こめていた。その姿にオズワルドは小さく「・・・すみません」と少しうな垂れながら小さく謝罪を口にした。

取り乱したオズワルドだったが、彼にはわかっていた。

普通、地上にあがる人魚は選ばれた騎士か、魔術師、王族の人魚

だけ。その地上にあがる際も国中で送り出すパレードを行うものだ。一番上の姉が地上に上るときも三日間は門出を祝う祭りが開かれていた。

だから、そういうことだ。

アリシアが地上に上ったということが知らされなかったのは、そういうことだ。

アリシアは自分の意思で地上へ上った。国をすて、海をすて、地上に上ったのだ。国の魔術師の力ではなく、海の果てに生きる忌々しい魔女の力によって。

アリシアは魔女と契約をした。この国の禁忌である契約を。

そういうことだ。

ああ、とオズワルドは嘆いた。

第三王女アリシア。オズワルドの三番目の姉になる人物だった。穏やかで気立がよく、いつも花のように笑う姫だ。七人の兄弟の中で一番おとなしく、父に一番可愛がられていた。けして父が他の兄弟を蔑ろにしているというわけではなく、アリシアには放っておけない雰囲気があった。放っておいたら、どこかで迷子になりそうな、そんなぼやんとした雰囲気。それは兄弟内でも共通していて、アリシアの上の兄弟だけでなく、下の兄弟たちもアリシアを子供のように可愛がっていた。

ただでさえ、現王の七人の子らは尊い”ふるきもの”。海中の加護を受けた神聖なものなのだ。七兄弟は大事に育てられ、その中でも一番の箱入りはアリシア。幼少のころに足に深い傷を負ってから、何年も治療ばかりで外にあまり出ていなかった。

そのアリシアが、地上にあがるなんて、信じられないことだった。

王女として海を愛していた彼女が、なぜ。

「……王子殿下、平気で?」

「平気だよ、ごめん。……セロイネア殿は陛下の下に行くんだよね?」

「はい」

「僕も行く。いいね?」

「御意に」

オズワルドは尾ひれを蹴って王の謁見の間に向かい、カツ、とセロイネアが靴を鳴らせながらその後続いた。

海の王との謁見

謁見の間に、王が現れた。

重く、疲れたように息を吐き、玉座へと座る。促すように視線をよこしたのをみて、オズワルドは口を開いた。

「アリシア王女を探しに地上へ上ります。お許しを、王」

オズワルドが頭を垂れて壮年の王に言った。この海を出るには、オズワルドは海の王である父親に許しを貰わなければならなかったけれど、王は首を横に振る。その申し出を予想してたとしても言うように、重く、首を振った。

「許さぬ。それは許されぬ事ぞ。アリシアに続いてお前も地上に上るなど、許されぬ」

威厳を持った王の声だったが、オズワルドの願いは消えなかった。キシキシと水が揺れるのを感じながら、またオズワルドは口を開く。「王よ、アリシア王女は大事なお方。見捨てることは出来ません。」

例え、魔女と契約を交わしていようと

ゴポリと、どこかで誰かがため息をついた。

「王子殿下、何故そこまで頑ななのですか。残念ですがアリシア王女はこの国の禁忌を犯し、魔女と契約をした。切り捨てねばならぬ存在へとなったのです」

ため息をついた男が言った。銀色の長髪を後ろで結わえ、緑の瞳を持った男だった。整った風貌の麗人だが、その双眸の色は冷たい。この城に古くから使える高位の魔術師だった。

「私には、やらねばならない事があります。セライド卿、あなたもお分かりの筈。もう一度言います、アリシア王女は大事なお方だ。どうか何も言わず、力を貸して頂きたい」

王子は尚も言った。

名を呼ばれた麗人のセライドは、王子が諦める様子のないことを察したのか、静かに傳いた。

「・・・お知りでしたか」

「それでもアリシア王女の弟だからね」

セライドに苦笑を返した王子は静かに目を閉じた。瞼に隠れた深い海色の瞳が、閉じられた闇の中で静かに思案する。どうやって王を説得しようか。長い間玉座に着きこの国を導いてきた王だ。賭けるしかないか、と心の中で呟いて、王子はまた目を開いた。

「王、命を賭けます。どうかお許し下さい」

ピクリと王の片眉が上がった。

「命を賭けるのか」

「はい」

「お前は王子であるぞ、オズワルド」

命を投げ出すような危険な真似をするな、と厳しさを含んだ声が王の謁見の間に響いた。

けれどオズワルドは怯む事無く言葉を放った。

「私は七兄弟の末です。命を賭けようと、この国が揺れることはありません。姉上たちがこの国を導いてくれるでしょう」

「だから捨てるというのか」

「いいえ、賭けるのです。アリシア王女を必ずお助けします」

王の頑なな意思は、つまりアリシアを捨てたということだ。禁忌を犯した王女を、国から切り捨てたということ。

涙を流してしまいそうになるのを堪え、オズワルドはその瞳を真っ直ぐ見続けた。

王の深い海色の瞳と、オズワルドの深い海色の瞳が厳しく睨み合った。多くの戦を潜り抜けてきた王の瞳は強く厳しく深く抉ってきたが、まだ生まれて十六になったばかりのオズワルドも引かなかった。その海色の瞳で、強く願う。

そうして、暫くの時が経った。

一瞬だったような時間は永遠のようにも感じて、謁見の間には大臣や魔術師たちにもよく分からなかった。ただ、尊い血を受け継ぐ二人の王族にただ気圧されていた。

「……よかろう」

長い沈黙の後、重々しい声で王がゆっくりとその頭を頷かせた。

オズワルドは一瞬小さく肩を揺らして、頭を垂れ「寛大なお心、感謝いたします」と落ち着いた声で言った。

王がオズワルドから目を離れたのを合図にこの話は終わった。オズワルドはサツと着いていた膝を上げ、謁見の間を後にする。颯爽と去り行く王子の後を追うのは二人の傍仕え。腰に剣を下げた二人の騎士だった。

「……陛下、よろしいので？」

セライドが言った。王が許しを出すとは思っていなかったようで、意外そうな顔をしている。

王は重々しくため息を吐いた。

「仕方あるまい。あれは一度言ったら引かぬ。まったく、あれは変なところばかり后によく似おって」

「確かに、兄弟の中でオズワルド殿下が一番王妃に似ておいです

ね

「困ったものだ。セライド、オズワルドに就け」

王の言葉にセライドは王を見た。

オズワルドの元にいることに不満はなかったが、高位の魔術師であるセライドには仕事はあった。

「王子殿下に・・・でしょうか。ですが、私は神殿にいなければなりません」

「わかっておる。あれが上に上るまでだ。頼むぞ」

有無を言わさぬ王の言葉に、セライドは左胸に手を当て、静かに流れるような礼をした。

「海の王の仰せのままに」

立ち上がったセライドはオズワルドを追い、謁見の間から消えた。

「アリシア・・・」

残った謁見の間に、娘を思う悲痛な父の声が小さく木霊した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2549ba/>

人魚姫と人魚の王子

2012年1月6日22時49分発行